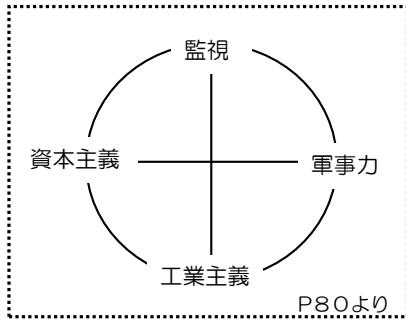


ここまでのあらすじ

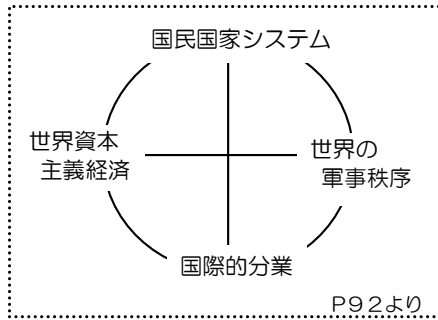
② 「近代とはいかなる時代か?」

特性としては、このような制度をもつ時代。



モダニティの  
もつ3源泉  
→  
時空間の拡大化  
脱埋め込み  
再帰性

グローバル化の中での現われ方



III

101 **ギデنزの主張** 「信頼は、近代の諸制度と根本的に結びついている。」(P41L8)

「信頼関係は、時空間の広範囲に及ぶ拡大化の基盤となっている。」(P111L14)

⇒ 信頼関係の本質について考察する。

コメント [R1]: 信頼関係が、時空間の拡大化の条件である、ということ。

102 **信頼とモダニティ**

概念の整理と定義づけ

- 《再埋め込み》: ある社会関係が、その時・その地域の文脈を離れて、作り直されたり、他の遠方の社会に利用されたりすること (ex 女性の社会進出)
- 《抽象的システム》: 象徴的通標 (貨幣) と専門家システム (ex 飛行機) のこと
- 《顔の見えるコミットメント》: 実際に顔を合わせて確立する信頼 (ex 家族、友人 etc...)
- 《顔の見えないコミットメント》: 《抽象的システム》への信頼 (ex 誰が飛行機を作っているのかは知らないが、飛行機が墜落しないことを信頼している)

ギデنزの論旨

- 脱埋め込みメカニズムは、いずれも再埋め込みをとげた行為状況と相互に影響し合い、その結果、再埋め込みした行為状況は、脱埋め込みメカニズムを支えるか、あるいは蝕んでいくこと。
- 《顔の見えないコミットメント》は、《顔の見えないコミットメント》を必要とすること。

103

“stranger” の意味の変化 …議論の出発点として

前近代社会: ある村にやってきた、その村の人からすると怪しい人。

近代社会: 歩いていけばすれ違う、大勢の見知らぬ人。

104 ㊦ 私たちは一瞬にしても夥しい数の人との関わりに、どのように対処しているのか。

⇒ **儀礼的無関心**

カナダ出身の社会学者、アーヴィン・ゴフマン（1922-82）が提示した概念。  
105 都会の街中ですれ違う人に、一瞬視線をやり相手を認識しながらも、すぐに目を逸らして敵意がないことを示すような行為のこと。

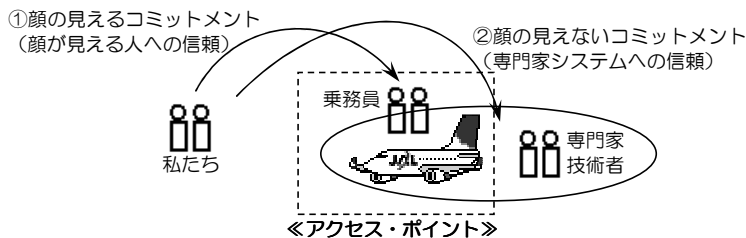
「儀礼的無関心の維持がいかに重要かは、儀礼的無関心を欠いたり、侵害した状況を思い浮かべれば容易に理解できる。」(P104L10-11)

= 目をあわすことを一切避けていたり、一瞥しても憎悪が込められていれば、それは信頼関係を築けていない証拠。

106 **抽象的システムにたいする信頼**

「信頼性には二種類ある。」(P106L8) ⇒ ①顔の合う人への信頼 ②抽象的システムへの信頼

**ギデンズの主張** 「抽象的システムにたいする信頼は、多くの場合、そうしたシステムに責任を負う人間や集団との出会い（《アクセス・ポイント》）を必要としている。」(P106L14)



107 **【大前提】「誰も抽象的システムからは逃れられない」**

108 …前近代ならば、専門家（ex 聖職者、妖術師）の知識は、安心を与えるものであったし、これを無視しても生活を続けることができた。

⇒ しかし、近代において人々は、専門家知識からもたらされる利益計算やリスク計算に依存しているため、これを無視して生きていくことはできない。（ex 核戦争、生態系壊滅の恐れ）

⇒ 抽象的システムを信頼するしかない。



109 「**関係者の信憑性**」と、「**知識や技能の信憑性**」とによる、二重の不安の解消が必要。

「もちろん、「**信頼性の真のありか**」（飛行機が墜落しないことへの信頼のありか）は、その信頼感を特定の脈絡で「**表象する**」個々の人間（乗務員。「**関係者の信憑性**」）ではなく、**抽象的システムのなか**（丸枠の中。「**知識や技能の信憑性**」）であることを誰もが認識している。」(P108L17)

⇒ とはいえ、アクセス・ポイントでの経験は、抽象的システムを運用する人が、誤りを犯す可能性のある生身の人間であることを思い出させる。そのため、信頼は、専門家や関係者の適切な「物腰」(ex 厳粛な裁判官、快活な乗務員)に強く依存する。

⇒ また、「知識や技能の信憑性」とはいても、通常、専門家知識の行使は非常な集中力が必要であり、偶然性という要素が入り込んできたり、間違いを犯すことがありうる。したがって、専門家や関係者も、人々を安心させるために、自分たちの行うことを隠そうとする(舞台上と舞台裏の峻別; ゴッフマン)。= 舞台上のパフォーマンスがより強化される。

こういったことは一般人と専門家に限らず、仕事における社交的な食事や出張といったように、仲間同士においても「顔の見えるコミットメント」が信頼感の基盤を再確認し、更新している。

### 信頼と専門家知識

② 我々はどうして、自分が完全には知らない社会システムに対して、専門家知識を信頼することができるのか。また、その信頼はどのように維持されていくのか。  
(システムの分析から心理学的な分析へ)

(要約) 人々ははじめ、学校教育の過程で、知識と同時に、その知識に対する敬意も暗に教え込まれる。しかし、知識が絶対的に確信できないことを知ったとき、敬意と懐疑が入り混じる。そのようにして人々は、専門家に対して、敬意を払うと同時に、懐疑心や敵意を抱くようになる。しかし、あらゆる信頼関係の奥底には、そもそも両面感情がある。なぜなら、信頼は、知らないことが何かある場合に必要とされるものであり、「知らないこと」は、つねに懐疑や警戒の原因となるからである。「信頼」とは、そういった懐疑や警戒があったうえで、懐疑に対処する可能な選択肢が排除されていることを受け入れることである。(ex 水道水にフッ素が入っているかもしれないが、引越せないし、ペットボトルを買うまでもないから、信頼する。)ここで注目すべきは、人々がこの事実をしつしび受け入れているということではない。抽象的システムに信頼を寄せるか寄せないかは、(前項でも述べたとおり、)「アクセス・ポイント」での経験に左右されるということである。

「人間以外の対象の信憑性にたいする信頼は、一人ひとりの人間の信憑性や養育にたいする、もっと原初的な信仰にもとづいている。」(P124L2)

⇒ 「人格にたいする信頼」を分析する。

※「信頼感の心理学的発達過程の核心部分に、時空間の拡大化という問題を再発見することになる。」(P122I12)

ギデンスが示したいのはあくまでも、「**信頼**」が、モダニティの特質である「**時間と空間の拡大化**」を支える基盤になっているということ。それを示すために、幼児が成長して社会の中で自立して生きていくまでの過程に言及しながら、「**信頼**」が「**不在**」と密接に関わりあっていることも導く(?)

コメント [R2]: 時間と空間の拡大化を担う抽象的システムに対する信頼も全て、人格への信頼が基本になっている。

時間と空間の拡大化←抽象的システムへの信頼←人格への信頼

信頼と存在論的安心

117 **存在論的安心** 自らの存在の本質に関する安心。自己のアイデンティティの連続性や、行為を取り囲む環境の安定性に対して確信が抱けること。

① なぜ人格への信頼を考えるのに、「存在論的安心」を持ち出すのか。

「人とものごとの信憑性にたいする意識は存在論的安心感の基盤をなしており、それゆえ両者は、心理学的に密接に関係している」(P117L2)から。

118 ② 「本当の自分とは何か」「他者は本当に存在するのか」などの存在に関する問いについては、誰も論理的に答えは出せない。核戦争への可能性がないと確信できる人は誰ひとりとしていない。それなのに、なぜ人は、重度の不安状態に陥らないのか。

⇒ **基本的信頼** (=幼児と介護者との間に確立されるような信頼関係)があるから。幼児期における母親に対する信頼(他者への信頼)が、信憑性に関する内面的な感覚を形成し、自己の安定したアイデンティティの基盤となる、自分自身への信頼をつくっている。幼児は、母親からの一貫した思いやりの世話に対して信頼をおくようになるのと同時に、相手が自分を信頼できるように自分の衝動を処理することや、相手を満足させるために期待される人間になりたいと思うことなどを学んでいく。(エリクソン)

⇒ さらに、幼児が社会という現実の中で生きるためには、母親が空間的・時間的に《不在》の状態でも、それに耐えることのできる能力が必要である。(D.W.ウィニコット)  
= 幼児は、母親の《不在》によって、自分と母親が独立した存在であることを知ると同時に、母親への信頼によって、《不在》が愛情の取り消しではないことを認識することができる。

「信頼は、時間的・空間的隔たりを括弧にくくって無視し、……生きるうえでの不安を遮断していくものである。」(P122L17)

⇒ 基本的信頼を維持するためには、予測可能な「型にはまった行い」の果たす役割が重要である。それが無視された場合、不安は洪水のように押し寄せる。(ガーフィンケルの実験)  
= 基本的信頼の維持は、視線や姿勢、身振り、普段の会話の約束ごとの絶え間ない**モニター**を通して達成することができる。

◆ **信頼の最も深い意味における対義語は、生きる上での《苦悩》ないし《危惧》である。**

前近代的なことがらと近代的なことがら

127 信頼には普遍的な心理学的特質がある一方、前近代と近代では、信頼(やリスク、安心/危険)を感じるもの、条件がまったく違っている。(P.129 図参照)

コメント [R3]: 要するに、「信頼」というものは自分の存在や安心感と深く結びついている。というのも当たり前で、もし「信頼」がなければ朝起きてから何も行動できない。

コメント [R4]: たとえば「こんにちは」と挨拶すれば、「こんにちは」と返すような。これが無視されると、「あの人は自分のことが嫌いなんじゃないか」という不安が押し寄せて、相手への信頼感がなくなって不信感が募ると同時に、自分の存在も揺るがす。

コメント [R5]: 無視されてはいけない。(儀礼的無関心の実践が必要であることがここでも示される。)

コメント [R6]: 普通に考えれば「不信」だが、信頼の対義語(=信頼が欠如した場合)に何が起こるかというところ、ギデンズとしては「懐疑心(不信)」ではなく、むしろ「不安」だろう、と。そういうことを言っている。